



永島孟齋画

女條田仙果經

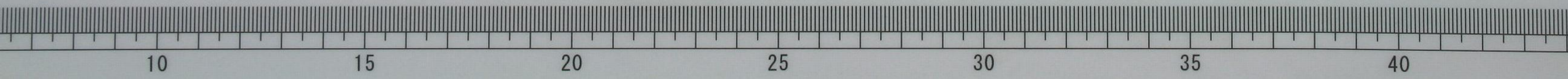
藻汐草近世奇談

青盛堂壽梓

二編下

二編中

二編上





藤泊

子

色世奇法

二海の上

仙果綴

至多也



文後

緒言

原来非力の小生が、嗚呼、まほしうも、秀筆より硯田と
 耕やせ、作漢と号され、時種ハ不流行が多、さう
 こそ、肥良学に乏、依て言葉小花と咲せ、實の
 有趣向ハ得易う、以本年丈夫故畑と變へ鴉り
 何、由探報者が、摺袂出せ、實説新話一、下、鍬、鍬
 う、な、ひ、返、し、男、女、共、道、を、い、ね、色、情、の、
 カッホレ給ふ、と、老婆心、を、物、せ、に、あ、ん

明治十二年一月

篠田仙果記



東京教寄屋町
藝妓小蝶

澤浮屋
金の助

大坂北之新地
藝妓小龍





悪漢
風閻の兼造

むら
おま
のま
喧嘩

藻汐草近世奇談二編上之巻

初編の巻 曾玉橋の裏切

おまのまの探る実母の借帳

と大のふれんび原の

業を以て尚之に同丸せ

そのおらの

松がはる

張ての

去出とを

依ま弟の

勇吉方へ再嫁せ

小娘の

▲まはれ共大坂へまはれ合へ
まはれ合へ
まはれ合へ
まはれ合へ
まはれ合へ

決へ

おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ

おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ

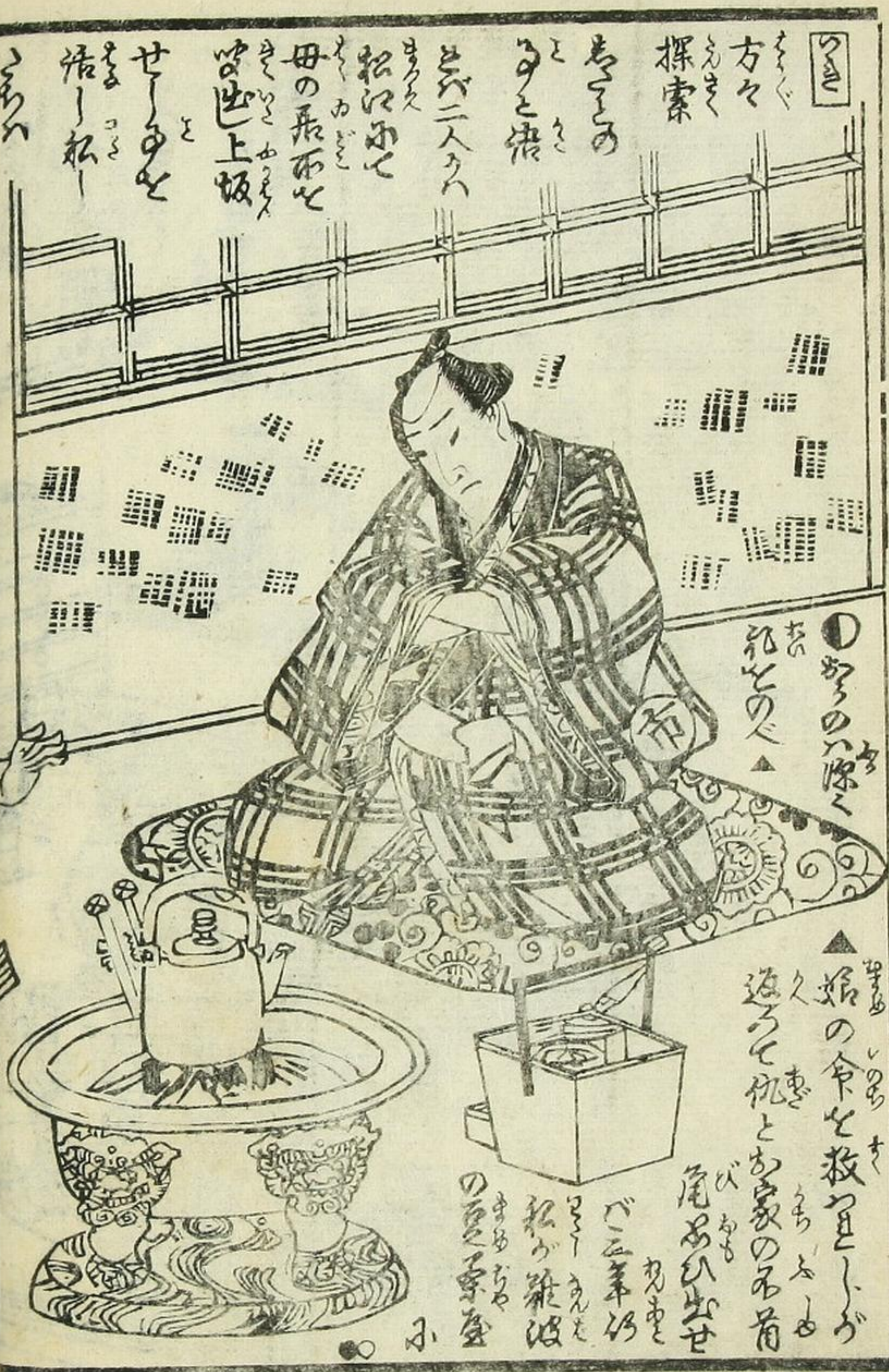
おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ

おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ

おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ
 おきつゝおきつゝおきつゝ



次へ



方々 探索
 母の長衣
 世に上坂
 せしめを
 活し松

● 女の命を救う
 娘の命を救う

▲ 娘の命を救う
 娘の命を救う



母の長衣と世に上坂
 せしめを
 活し松

助て...
 娘の命を救う

お宅の不肖尾娘多し宮崎若の親子二人ががぶあぢも

安さんう伯父さあむい後方ゆりふとをまるとも

根後一を後い何れもは後方ゆり

相背あらのをまへ運きて

お相持あつ波田あつり

終々と安はあつ波田あつり

伯父あまのいゆりれど幼雅あつり

お相持あつ波田あつり

と家あがりごふせて後方ゆりふとをまるとも

お相持あつ波田あつり

まはらぶあぢも

らんと二人が有り

くさ面とひらき

お相持あつ波田あつり

のいれ

とあ

さそ伯

父の指立

つあくあぢも

はあぢもあぢも

池をきくと刻付られて安はあぢもあぢも

まのこまあぢもあぢも

波田侯田の伯母の

者あぢもあぢもあぢも

宛のあぢもあぢも



あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

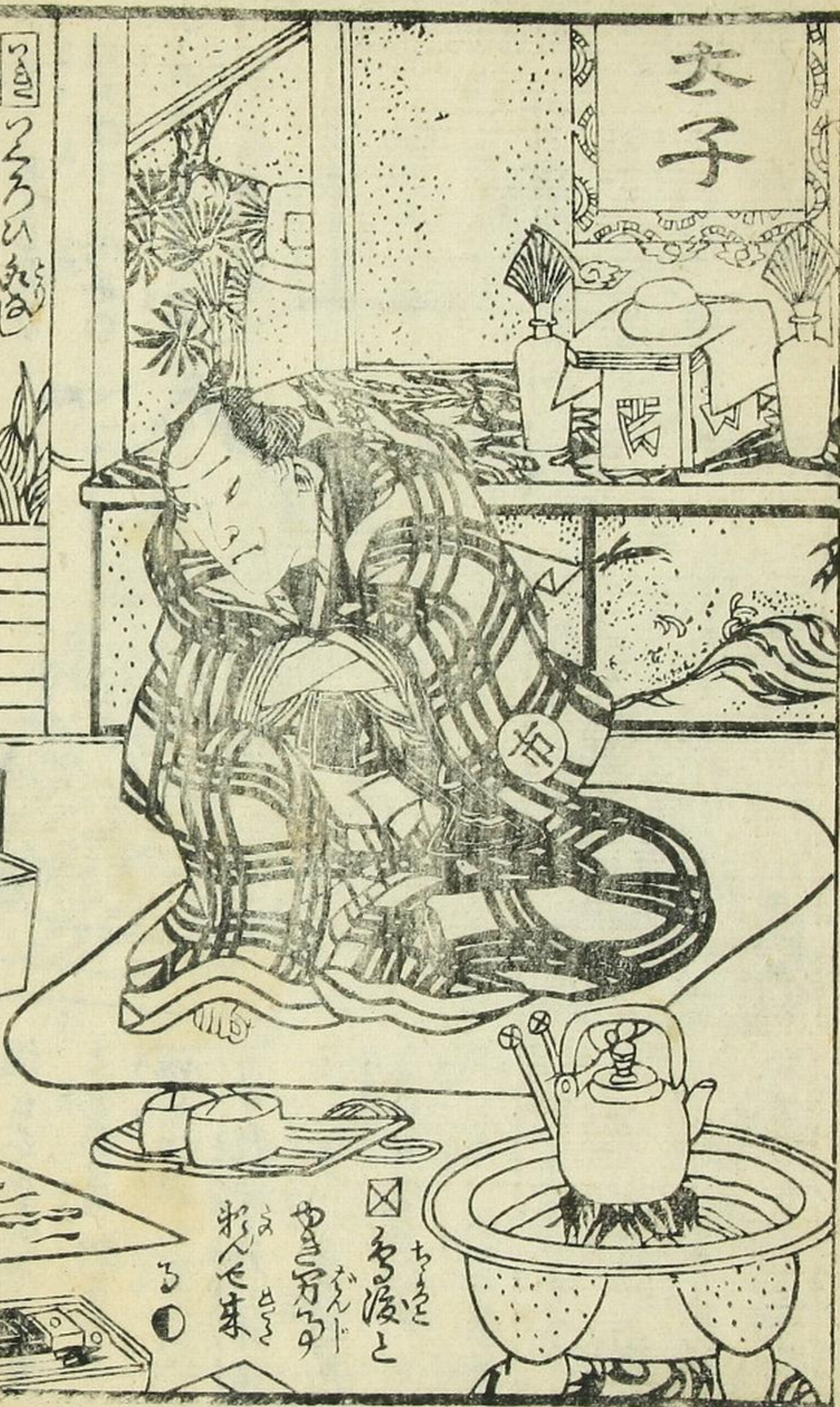
あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

あぢもあぢもあぢも

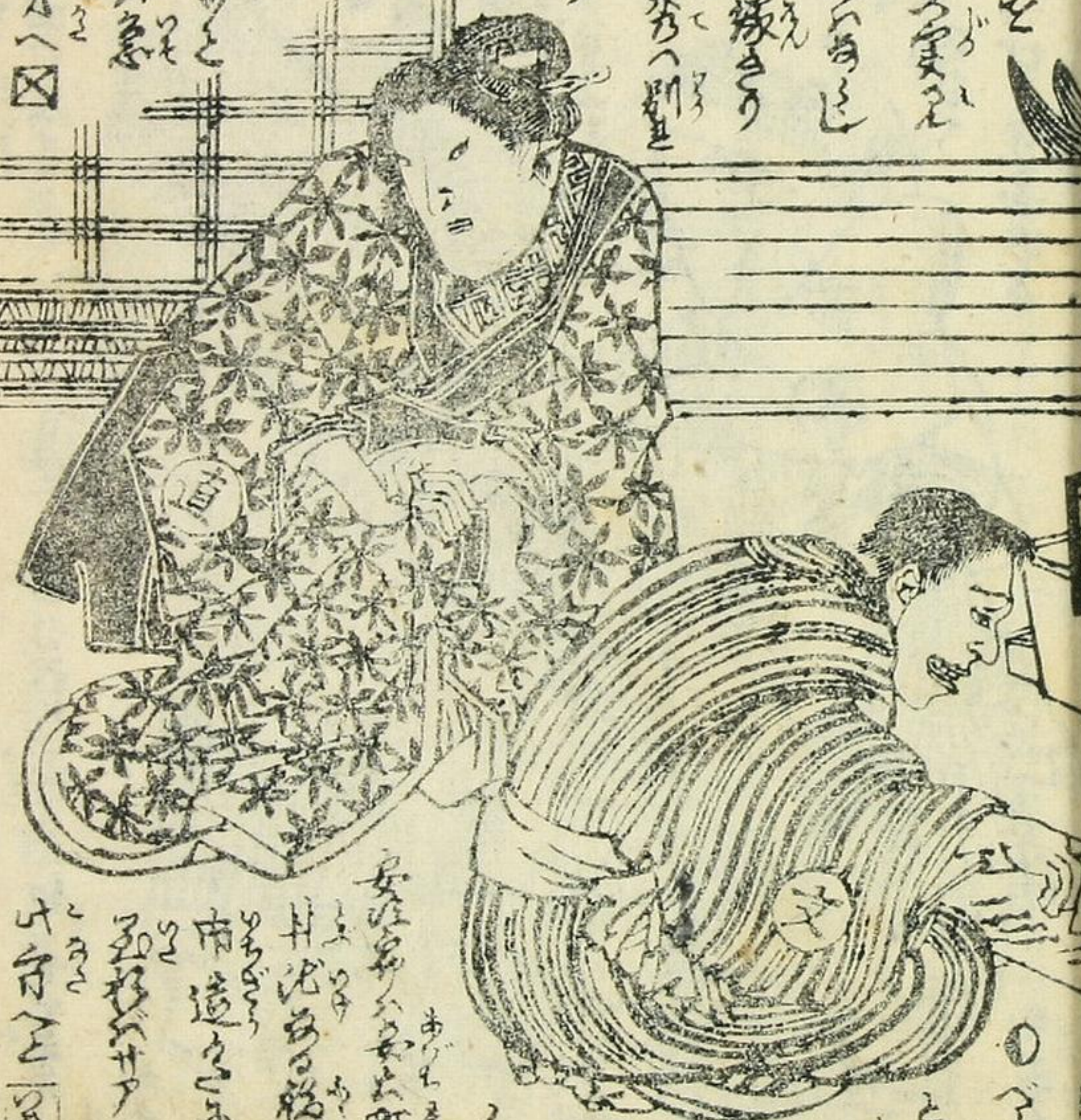
六子

つらつらひおのゝ
しり出人の出るまうら
とて



ちよと
ちよと
ちよと

つらつらひおのゝ
しり出人の出るまうら
とて
つらつらひおのゝ
しり出人の出るまうら
とて



女に寄る公無出町
井伏の松の
南造のふ
玉のむか
け守と
と

上果文上早二上

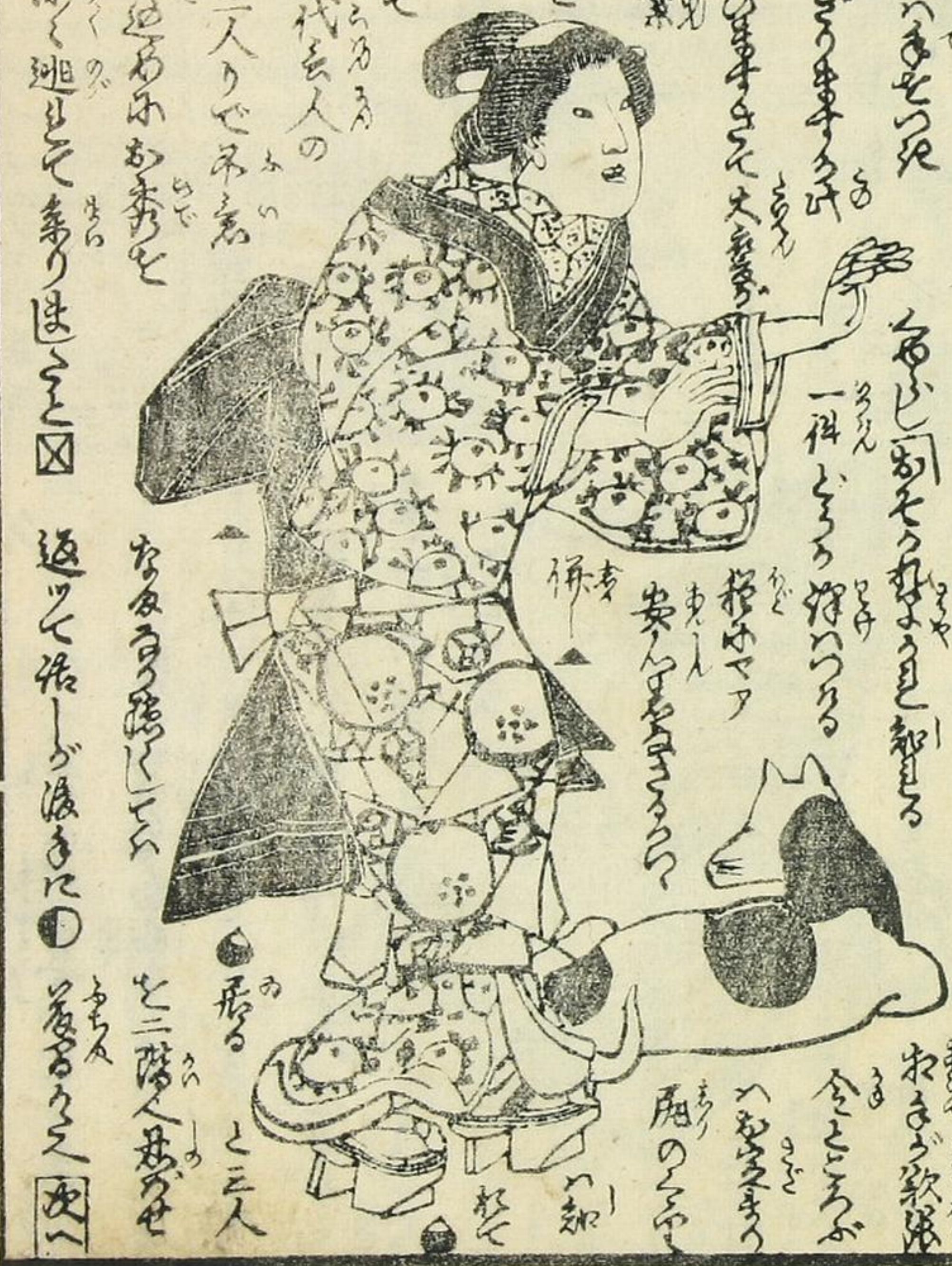
上果文上早二上

市道へ若衆人とて相
 纏く美えま
 すねえ門へ
 かえくと人カ
 車の善世がほやあめり
 物せと格子とめく入るあうの
 あ秀の親子
 二人妻のハ
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道



女房ふはあは
 二人の親子
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道

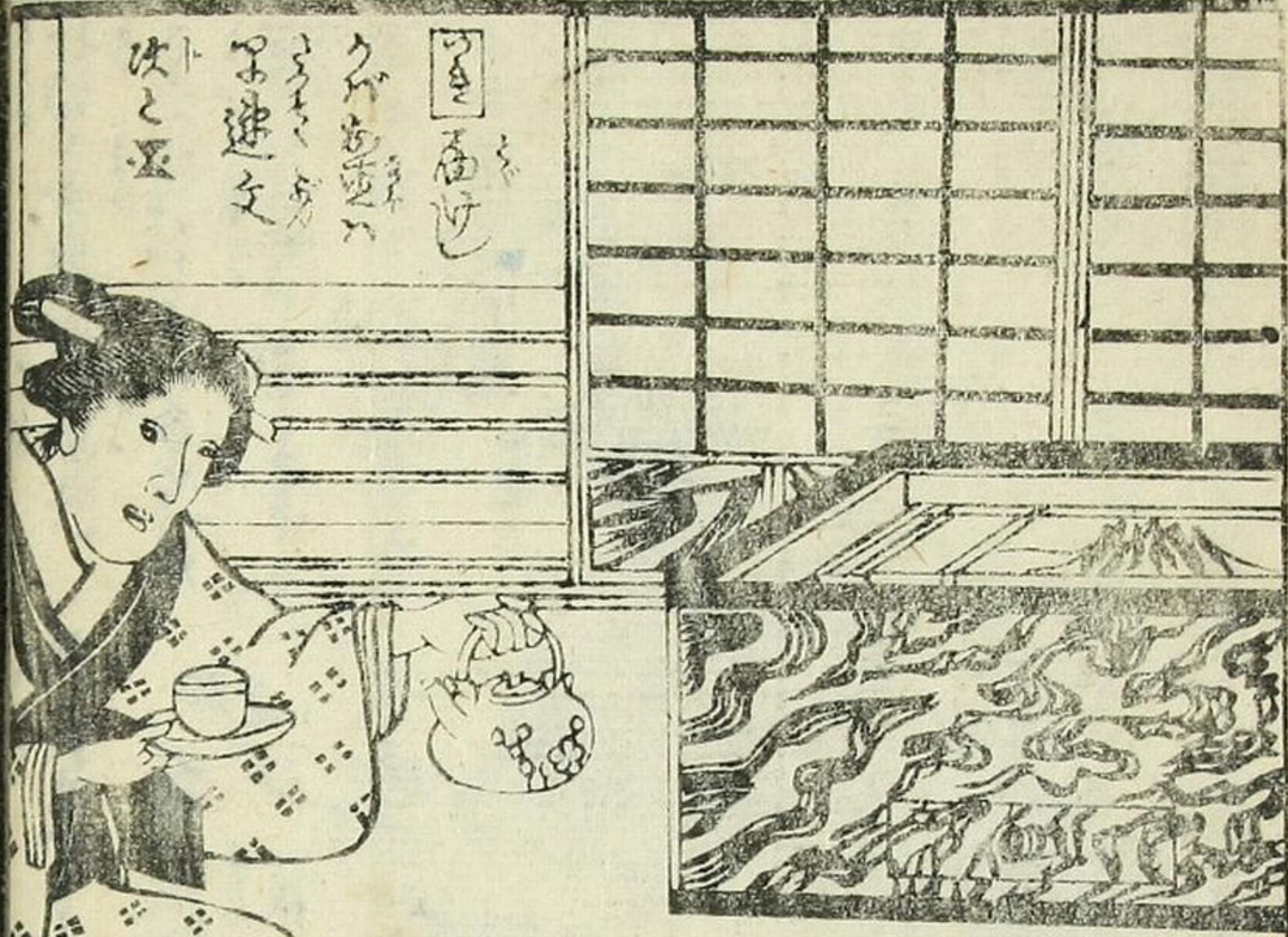
女房ふはあは
 二人の親子
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道



女房ふはあは
 二人の親子
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道

市道へ若衆人とて相
 纏く美えま
 すねえ門へ
 かえくと人カ
 車の善世がほやあめり
 物せと格子とめく入るあうの
 あ秀の親子
 二人妻のハ
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道

女房ふはあは
 二人の親子
 夫とんぐ彼
 か秀親
 子ありと父の市道



久松屋
子進文
次之五

煙のお赤と二才の煙草女小
あひらの遠ひのあふあ赤が 且つらあ
敬者のた後娼妓のあともう きの物るを
えはまの一切をな
あでありの後
伝世のあは
彼が忘こ
嫌ふ久
おと
の老
五十田
欲知た
を授不迎
不法の淫賣ありの強さるを坊



共入市造
方へ余り
やうかおまを
葉をくおまを
下されとひと市遠め止め

このれてお赤が水入る処を
安んずらわくま合せ助け
なまをそ今有まを赤令
そ迎を考かへるあ赤
方うを赤ふらあが赤人
砂利をつらへる遠の海す
あひ出赤あたハのあ赤の
示候ふまをまが赤の
全いあひやちをたら
らりとあ赤まをまの
招つるた返るも理の
赤赤さすサの

新編西國奇談



新編西國奇談

廿編より
追々出版

薄緑娘あなみ

八編より
追々出版

娘庭訓黄金の鶏

追々出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町一丁目六番地

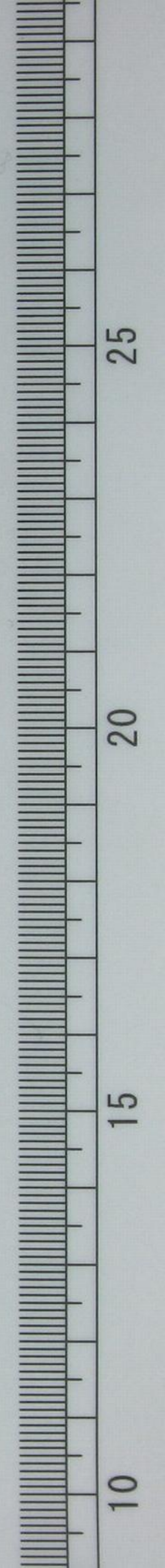
編輯人 篠田久次郎

地本錦繪問屋

日本橋區米沢町一丁目七番地

出版人 堤吉兵衛





元一不
くさ
近世家談
因果縁
孟子画

加々吉板
二編の
中



上のつぎ まて宛の終止して市道へ着根落るる伯父 〇安んずへ例の如く赤肉
年々方(由)安んずへ改んせと救世款
き程これと免まき女の有らねど
さう連一足程ぬき世情と仕子
やす おんずかや 安んず放穢象へおんず安んず
まの赤肉まれば也でも多ゆけと
蔵人の赤肉と蓋印
坊へ持まごびまめく安
働まらる市道へ
宗を道の所へ負石とてか
義を救世の善信と受合ふか子
蔵人赤肉と(港)市道もえまれば〇

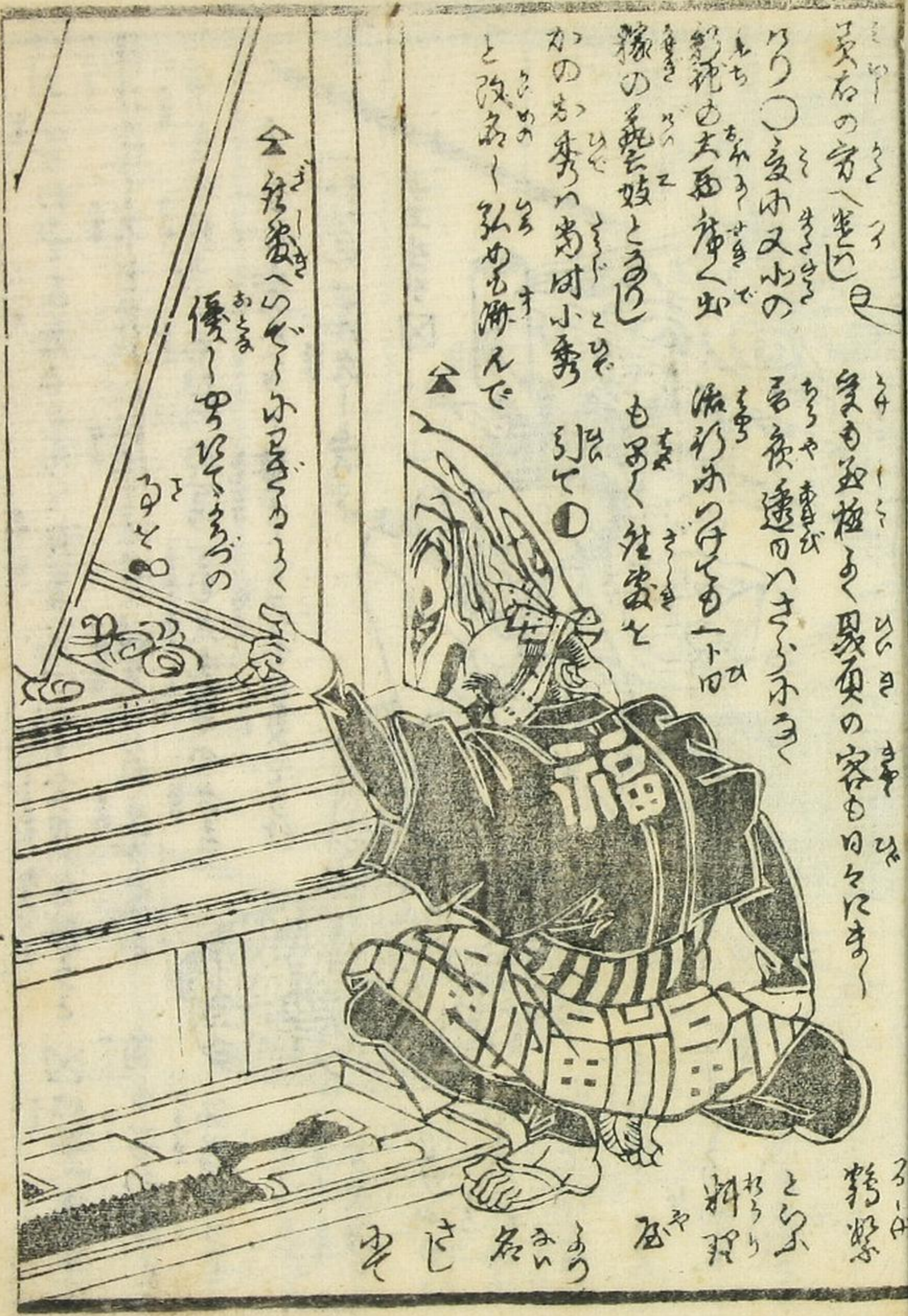


〇んずく英石の美い
あるそとも
〇んずく英石の美い
英石の
あんず
安んずがやうすとて〇

書物一掃を湯めさす小舞筆とも功者
 〇安江舟と原のどく一ツふりつ
 母のちうのふ安んさせんと
 夫のこ休や休みのり
 安江舟と原のどく一ツふりつ
 母のちうのふ安んさせんと
 夫のこ休や休みのり
 安江舟と原のどく一ツふりつ
 母のちうのふ安んさせんと
 夫のこ休や休みのり



安江舟と原のどく一ツふりつ
 母のちうのふ安んさせんと
 夫のこ休や休みのり
 安江舟と原のどく一ツふりつ
 母のちうのふ安んさせんと
 夫のこ休や休みのり



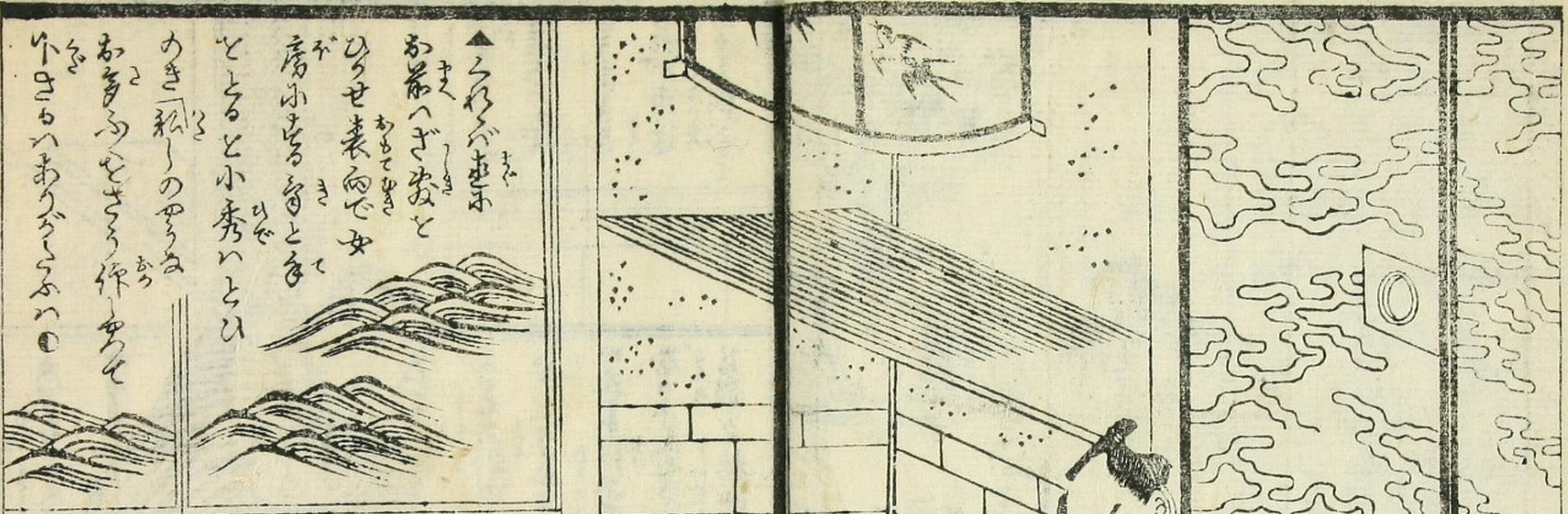


とまてしる
 のも雨雨を
 りんご
 の外
 由て
 松もお前の
 りに付て
 後ろ務と
 返



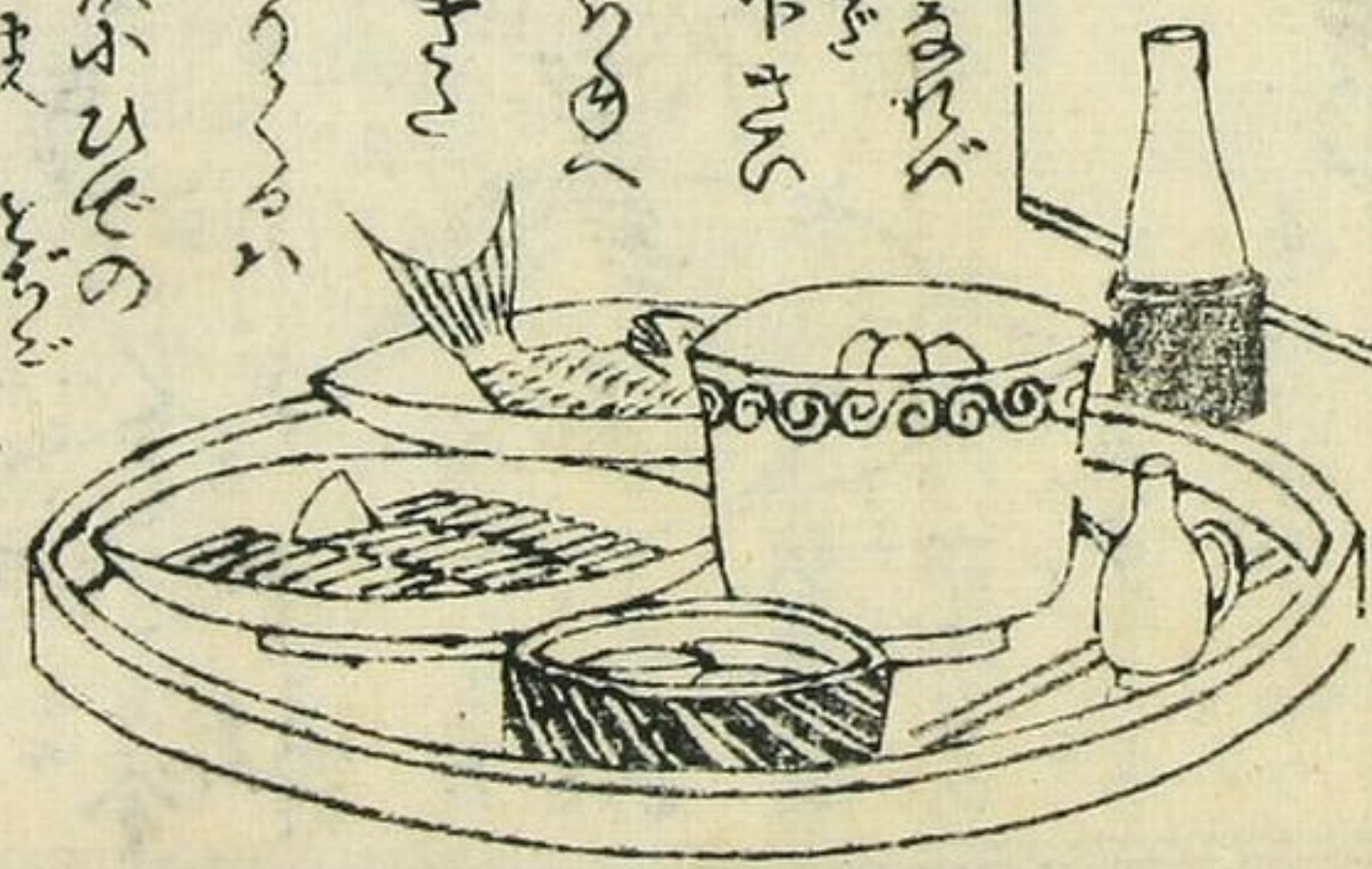
口がわをまなゆをそく経度へ如く今日の有難うと
 換授して客をんたればはあろるさく彼をいられまがふあ
 今まを控んとあひつめり南久宝寺の久吉
 小秀のハット数多くと久吉の妻と
 「おひやさん久くあうご
 子玉まや

此系へ巻も
 角一ツかのと
 返答とさ
 色一ツが
 今更遊
 つひの
 めうは計の
 むらたに
 す心地
 上りる向と
 久吉が
 此地へ



▲こればあは
お茶へぎと
ひらせ表向で女
廣小はるるると
ととると小秀いとひ
あき「松」のやうな
おきふとさう作ちて
外さちのありがふい

○ごうり
やうなれど
今更のまのあつた
その
イヤお茶あはるるると
ますまも急小でま
のちと漆子をぬて入り
代玄人の志願文次小ひ
侯へつらと居り「お茶の
市造が若松崎へ安次
別して放出とさるを
此文次をくんやを安次



人小
世入
報の
ぬし
その
り
己
松の
報
と
五

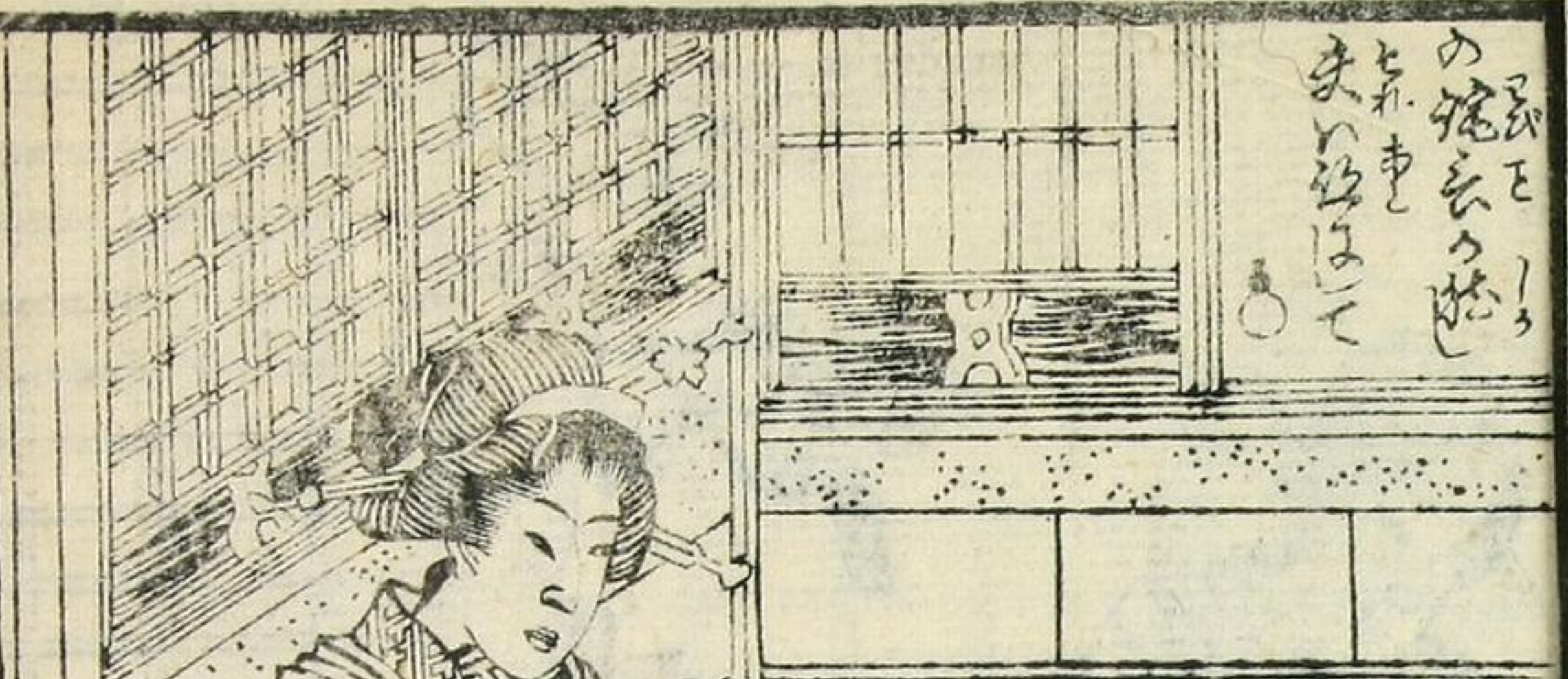
遠くへいりて
らうともな
これバ市遠
ぐるも別合て

あはれなる
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云

返すのしや
返すのしや
返すのしや
返すのしや
返すのしや

あはれなる
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云

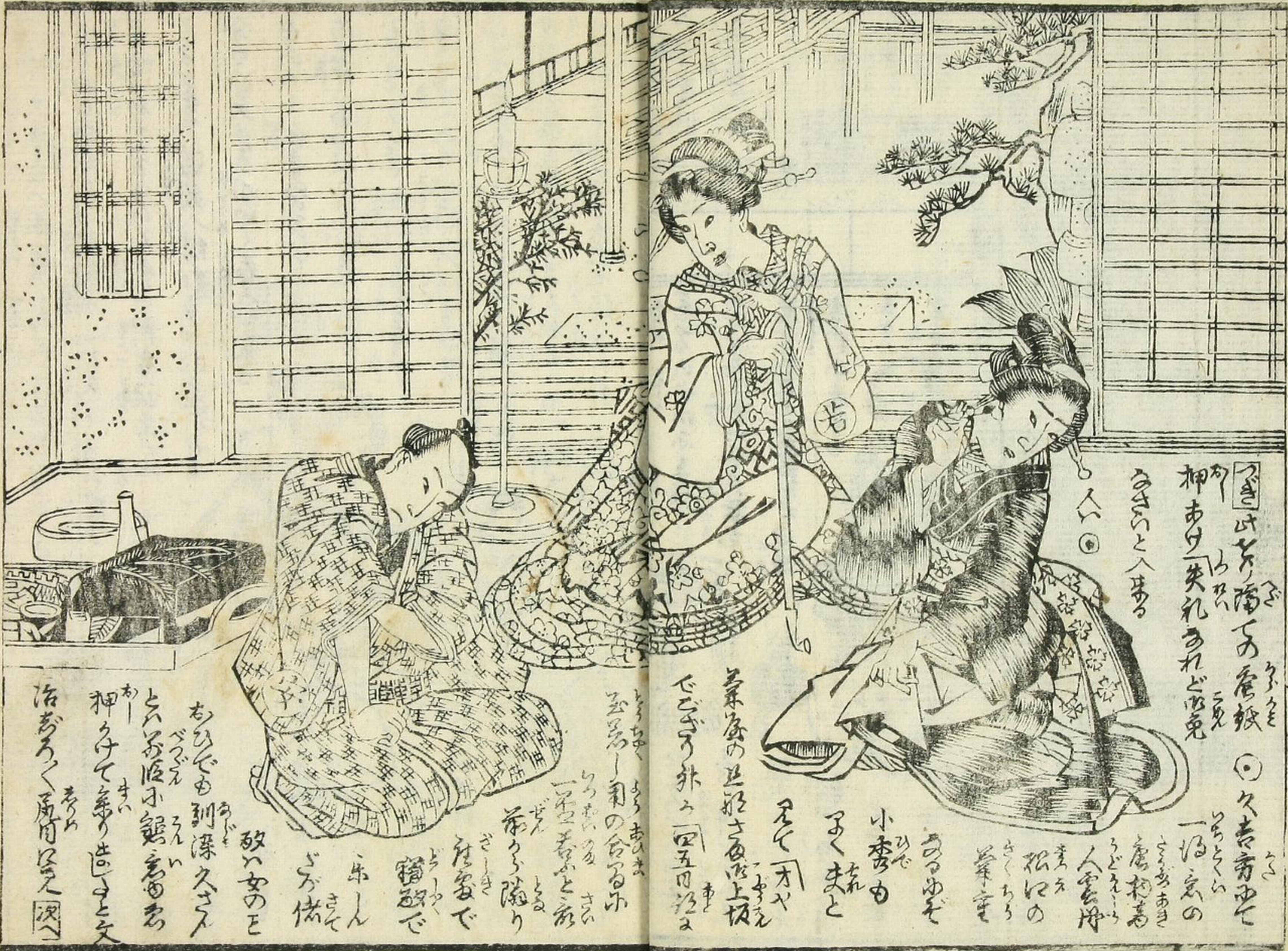
返すのしや
返すのしや
返すのしや
返すのしや
返すのしや



あはれなる
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云
あはれなるの云

源氏物語 第二

五



夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免
 夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免

人の

夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免
 夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免
 夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免

夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免
 夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免
 夕日かたしつるの春夜
 柳あり失れあれど必免

ついでに
 元來愛入愉快の席入らるる口をさかすぶたふ
 罵りぬ女をおまじけお罵り吐く笑く一の違々
 多事すか
 を合心助があるものお秀の判方状元と吐く
 止るがまアお怒入怒むむッがあるあせま
 今日いつさう面白く香あひある
 まのト云まのせれて久吉文
 治書とありい子酒をを園
 その日いつまき立別を屋後業
 室が中へ入るいさるい治まのり
 ○茨石の度之怪と巨安以希の真件
 小敷田向る勅めらるる人ととらふ
 藝妓の中ををられて終金の外



必らうく
 と唐
 なる同じ
 茨石の
 抱へ藝
 妓多取と
 呼のい
 言さるる言と
 安次と
 具負
 小澤者が別て
 又は

纏取もまき黄糸糸小身形つゆ
 自托と高世めけは浮き娘や
 親お妓まどうそる
 若もどうくあれは自托と浮き
 若急の浮き物又へ攻業の
 急も急と目々必



今ま
 救後長
 十か
 掃
 と心ひあ日
 茨石代り
 と入世長
 やす
 掃を
 会稽の次へ

情
 情
 情

西施と云は侍所

仲居のお竹小春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春



お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

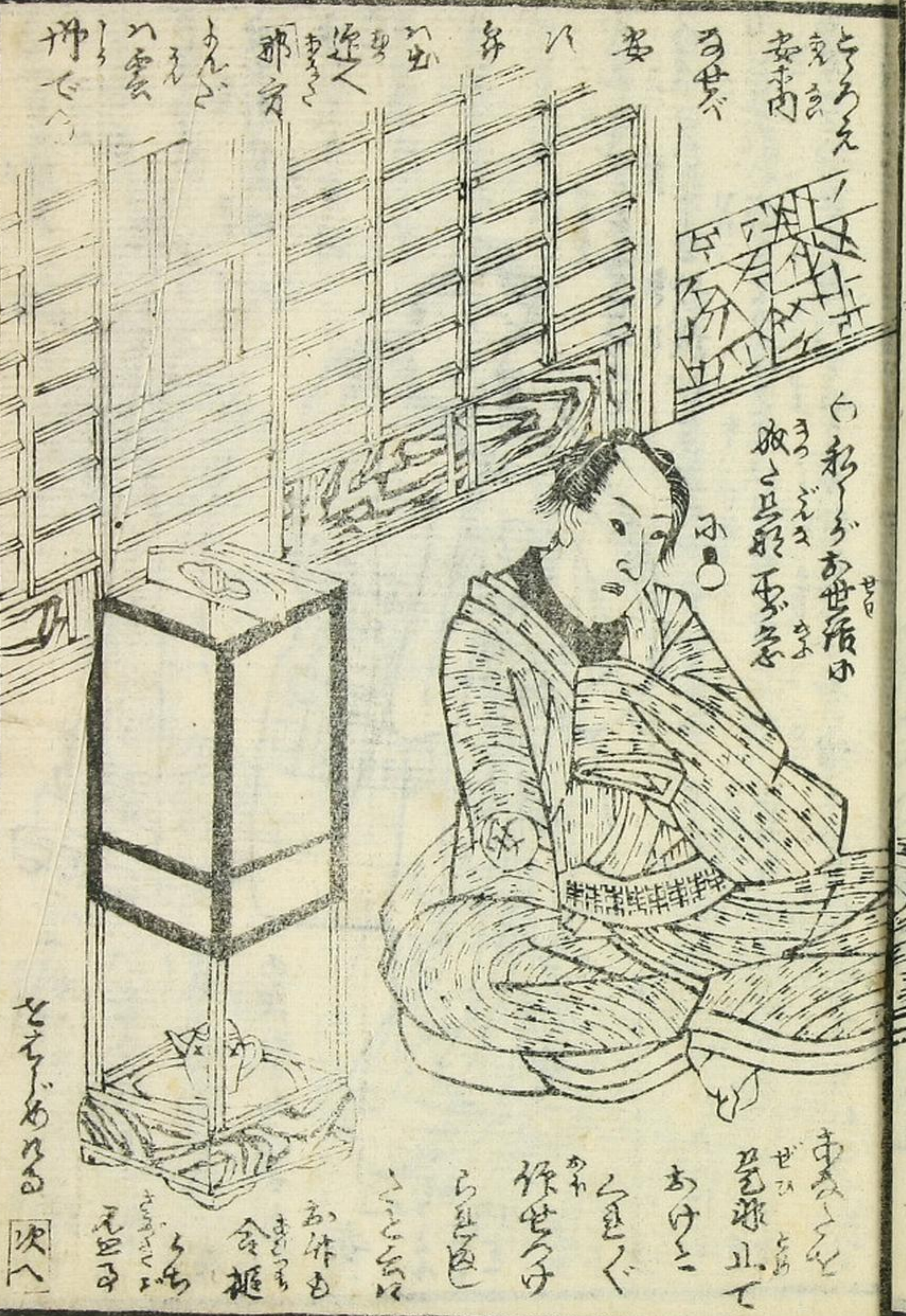
お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春



お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

お竹お春

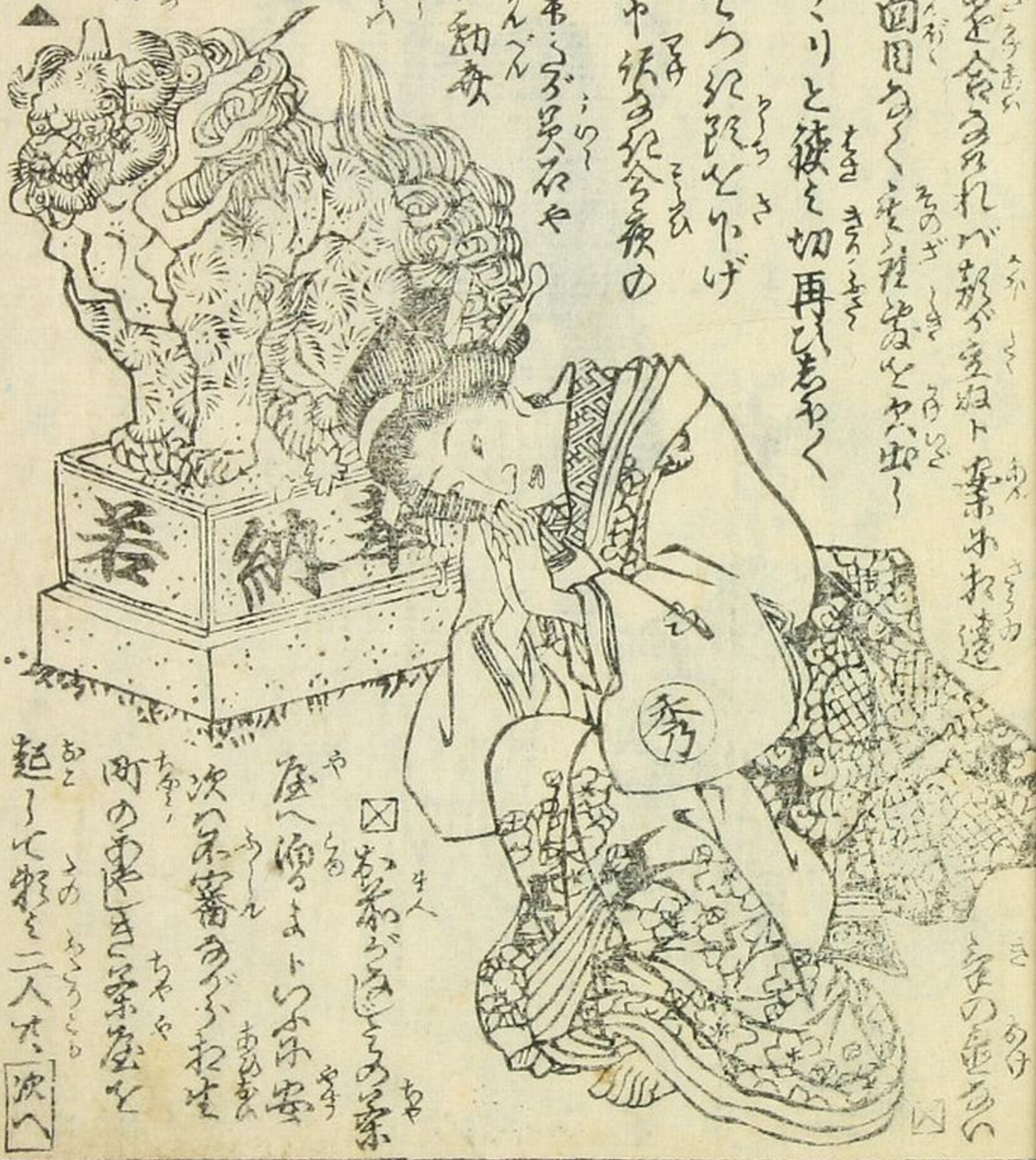
お竹お春

「さき」のうきさき
 以と仲居
 のあひま
 外せの
 中に入りや
 何よりし
 玉の
 「あ」ん
 あまの
 うきさき
 用とこれ
 結末との家も



沈んでしまふは
 け家の
 海よと令と後
 の交代らあ

我家へ
 の
 使と
 能
 結末
 け家へ



屋へ
 次
 所
 起して

新編西國奇談

二階へあがれはるは種まきと四付安は常小
 異如く一先初西尾を強く云つて那那也
 二人りが泊つてぞん
 と戸の建られぬ
 人の口まじい互ひ
 ののの常とあや
 態とあつた後
 多ておまをぬのよトおれ
 安ははるはるさん地をあらた換
 んもこのあつた後を結ひが羽まね
 安ははるはるさん地をあらた換
 多ておまをぬのよトおれ

二階へあがれはるは種まきと四付安は常小
 異如く一先初西尾を強く云つて那那也
 二人りが泊つてぞん
 と戸の建られぬ
 人の口まじい互ひ
 ののの常とあや
 態とあつた後
 多ておまをぬのよトおれ
 安ははるはるさん地をあらた換
 んもこのあつた後を結ひが羽まね
 安ははるはるさん地をあらた換
 多ておまをぬのよトおれ



新編西國奇談

廿編より
追々出版

薄緑娘あつたなみ

八編より
追々出版

娘庭訓黄金の鶏

追々出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

地本錦繪問屋

日本橋區米沢町二丁目七番地

出版人

堤吉兵衛

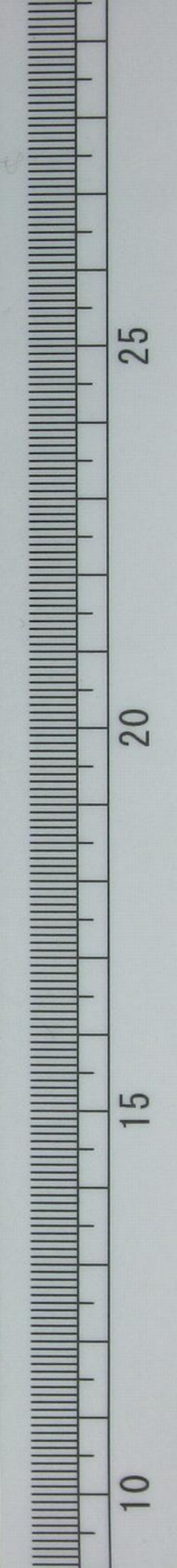




永島子血齋画

青盛堂画梓

二編下



10

15

20

25

も〜ほ州

ま〜むきん

あ〜たん

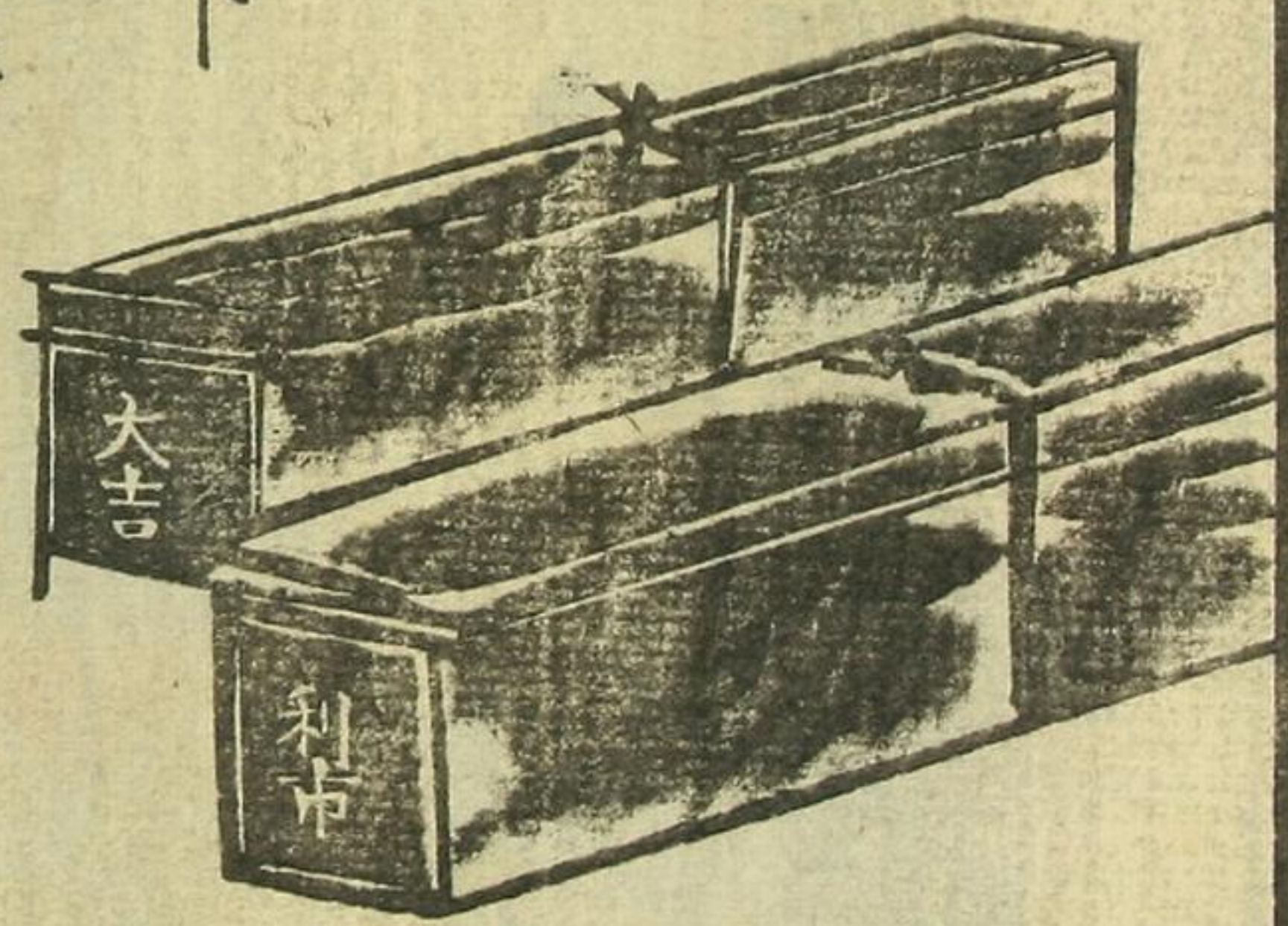
二緋の
下

心果法

よ〜虎

ま〜成皿半

あ〜梓



48-8116

中々 悪くも交ねと寂莫と林檎の 箱 丸まがりつろと行のふ渡り

歌ののふれなきはの彼安ん常の風雲の 安ん常自身の平陽少時何なる

えんねと年若死如るが社せや うれが小政でいさく怒を

お〜 上りもねいんぬ

昔芳ゆいといませねば ありて由一皮も返すをトさすぬい

何年まのんがさる母が 着病字をいあるまのくと母さんお仔

おん 教すゆの利量教ひ 上り 細とゆい後居る子に成げの起ろ

と赤ん顔小顔のう 教へるまをるかあよ 着玉さんとねくと若く石の暇せぬ

お〜 妻は命いさるへんを 細くはあけぬの ちや妻さんうとあけぬ ちや妻さんうとあけぬ



上

東京小間物類品

△おひたし

△

△すしつけ

△おひたし

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

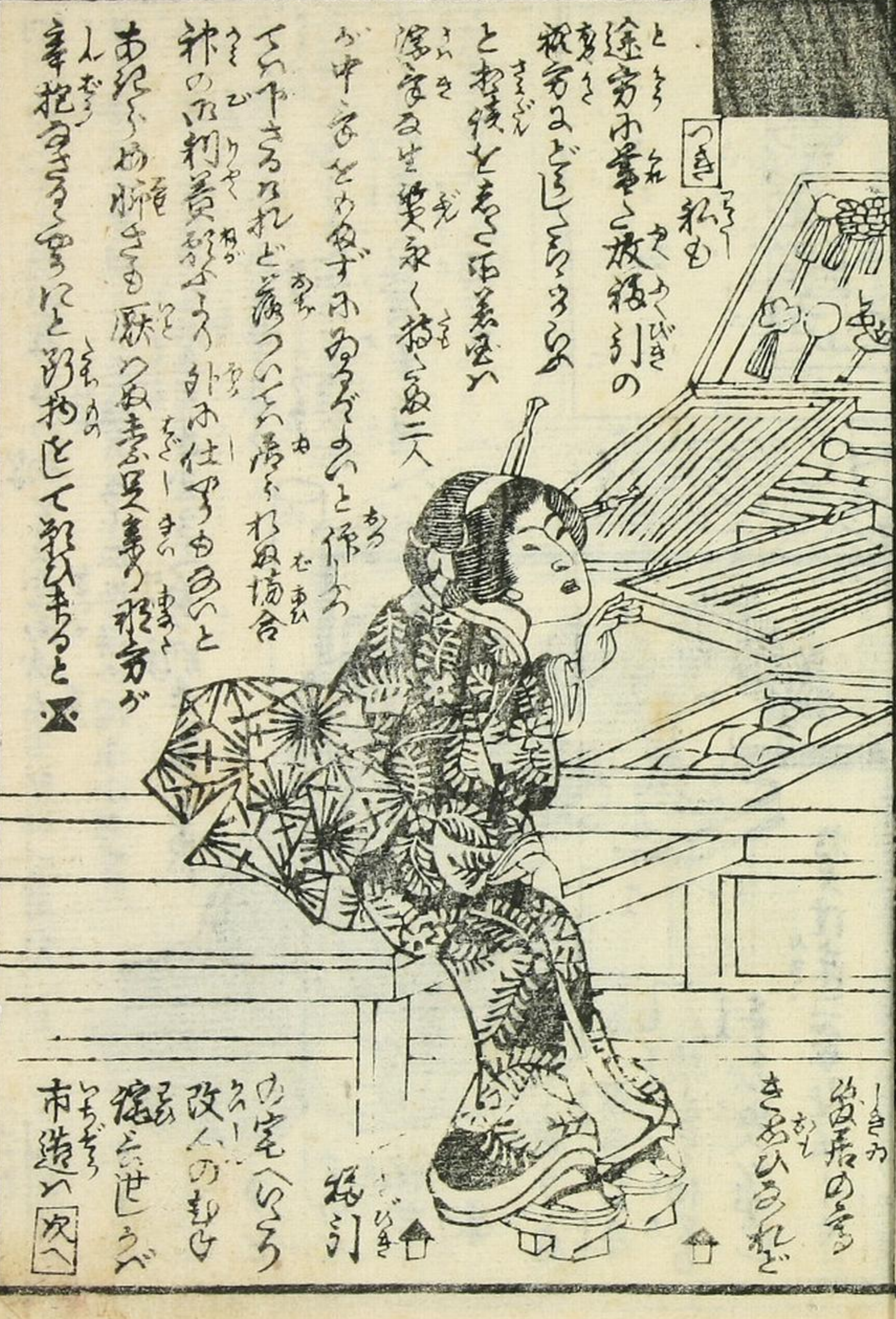
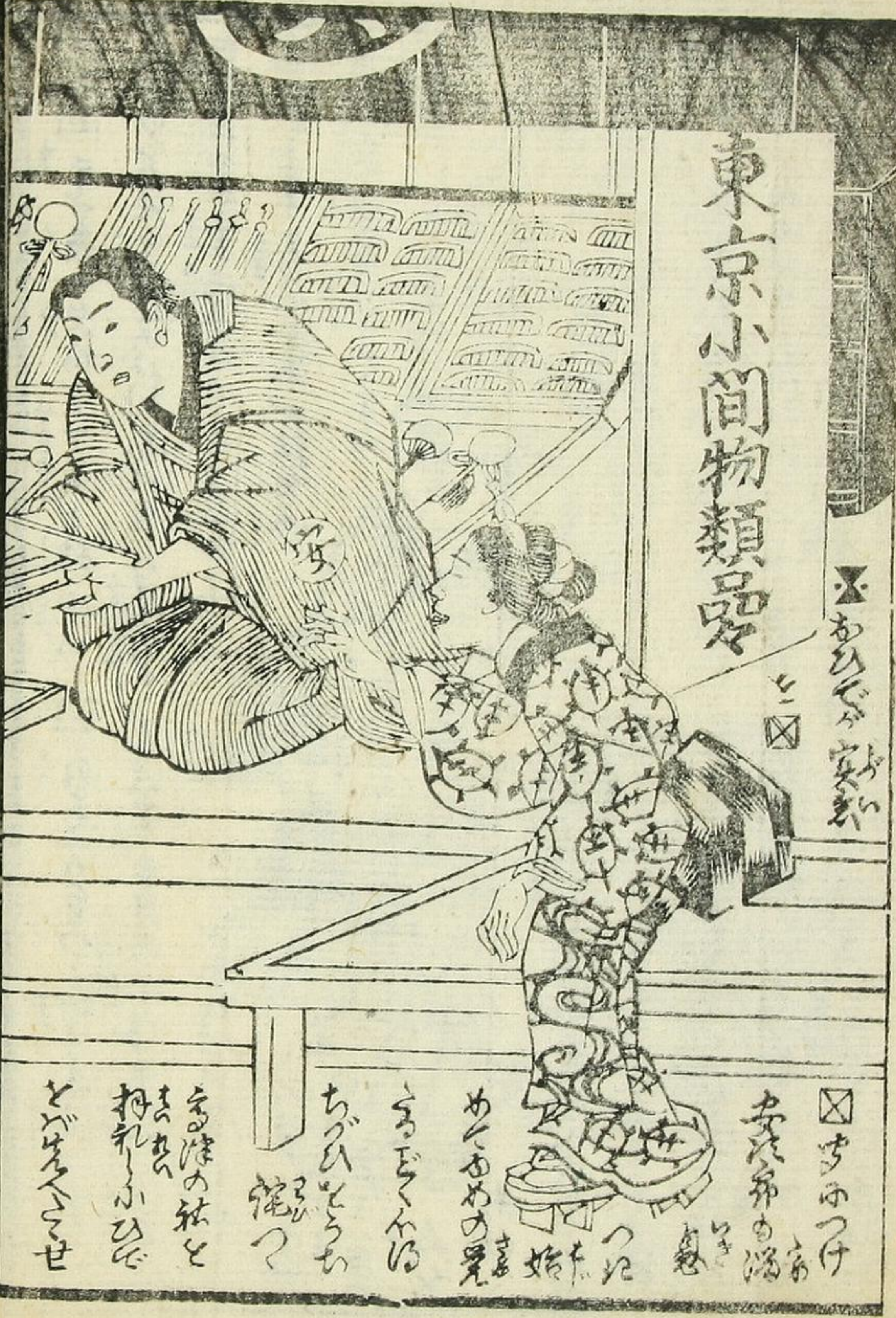
△

△

△

△

△



ついで

とさき 途旁小籠と放後引の

紙方よとさき

とお後とさき

とさき

か中をさき

とさき

とさき

とさき

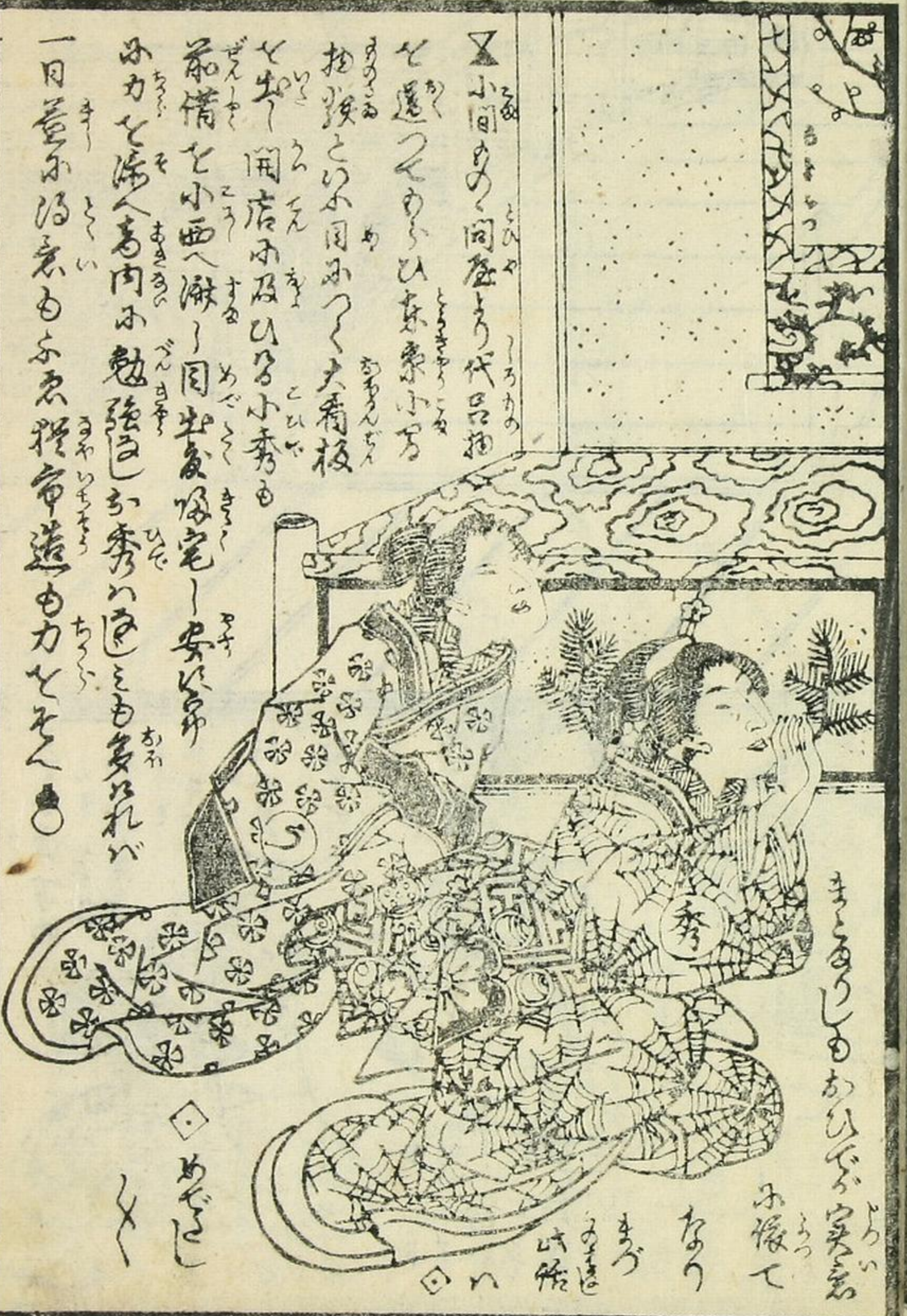
江戸草子 二下

二

〓 物なき云のびきり身命の物と使小若と云を切て身と
 新の碑き辛抱と云と傷りあふぬ悔悟の河小小ひさ
 返一安次と云と重利と云と日若必之と云、別き重利と云
 屬きまうわらの由候と云
 お徳と云と之の心と云と
 の小は通りの候家と借
 矢市道が出入候の〓

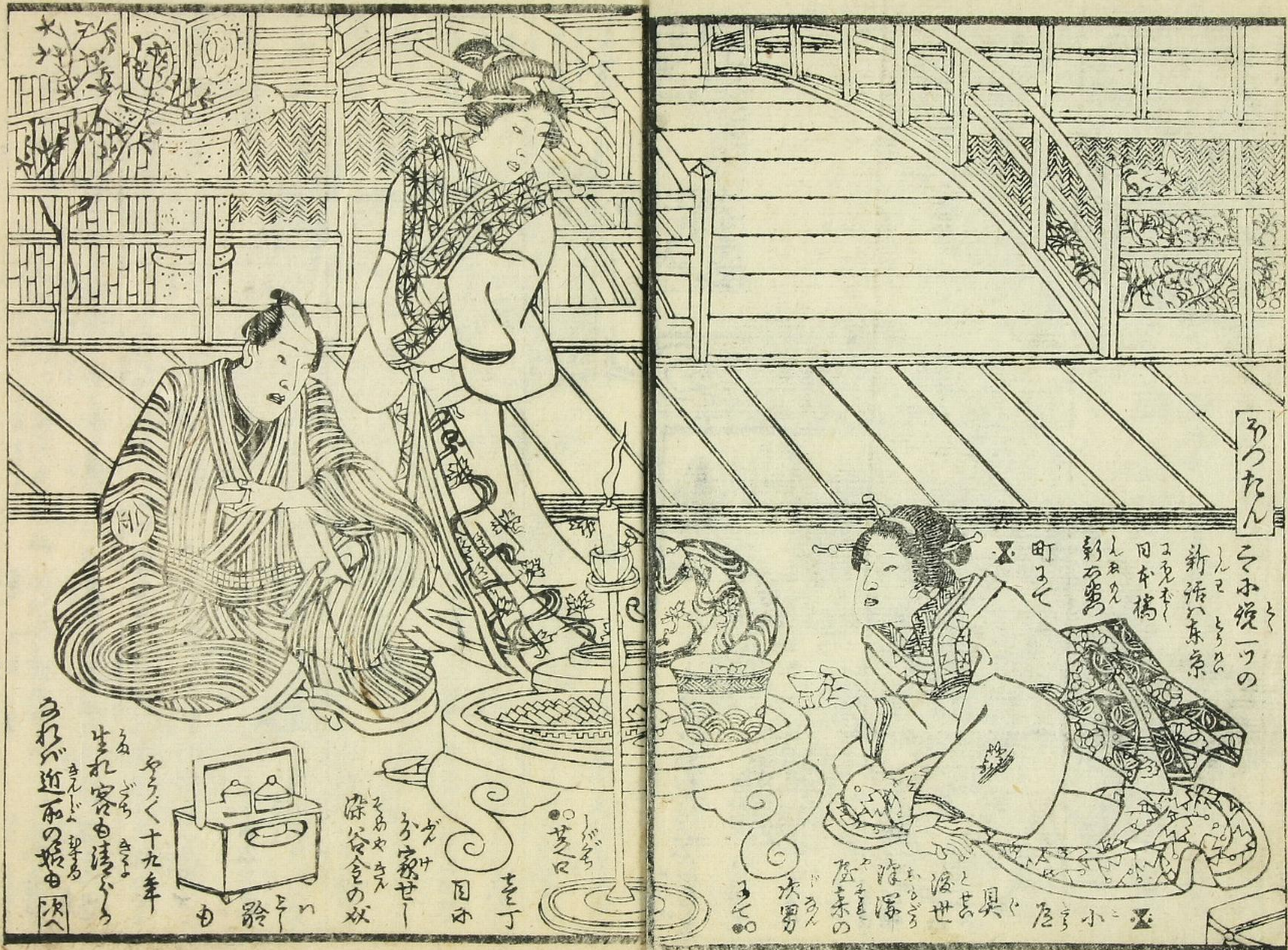


名文往來二家むらゝく
 抱とまけ候父由
 本とび出入と云し
 無うふぬ
 棚と云と
 徳せー
 平き工



〓 小同の同登より代呂抱
 と還つてのらひ東家小方
 抱候といふ同あつて大看板
 せ知一問店小及ひ小秀も
 前情を小西へ淋一問中家候宅一安次
 小力と云と内小勉強は小秀のほと由多はれが
 一日量小はる意もふゑ程命遣由力と云〓

まゝしむあひひが家
 小後て
 たり
 なる
 小後て
 〓 〓



景夕草

景夕草

あつたん

その後一ツの

新活の東京

日本橋

町

町

やうく十九年
生れ客も法
まれば近所の娘



かたせ
そのやま
海谷金の奴

芝口

目

丁

次男

ま

の

深

世

具

小

屋

小

屋

小

屋

ついでにと更の

舞臺一

女向の男の
風情を色を出

招へての教書

屋町へ

小探と云

舞臺

妓の舞臺

あが今更

と人

● 知れねど
紙幣を
ついでに
招へての
屋町へ
小探と云

後世
二処と云

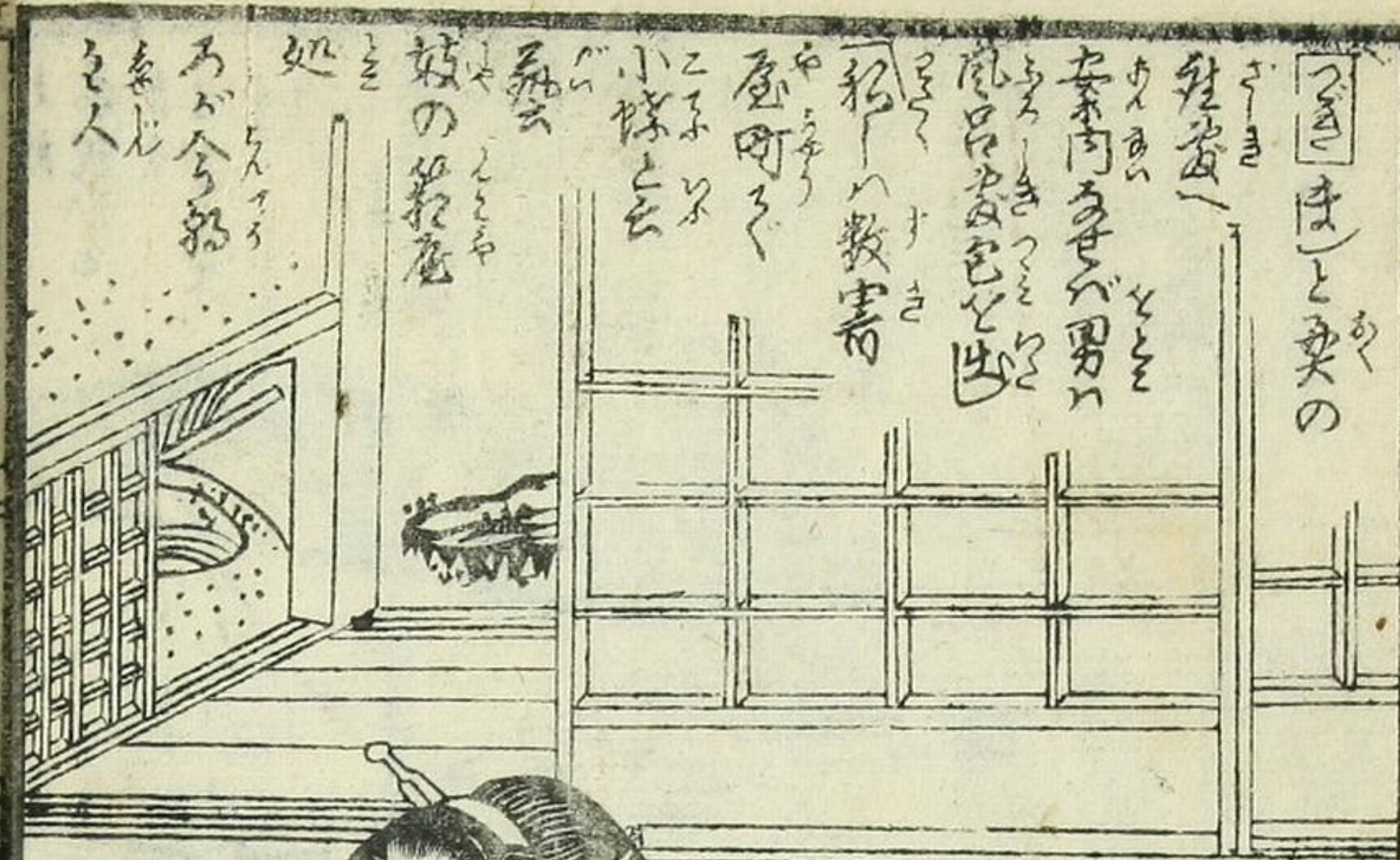
今と助い

舞臺
あが今更
と人

知れねど

紙幣を

ついでに



小探と云

舞臺

妓の舞臺

あが今更

と人

● 知れねど
紙幣を
ついでに
招へての
屋町へ
小探と云

後世
二処と云



今と助い

舞臺

あが今更

と人

知れねど

紙幣を

ついでに

と小探の云付

次へ

さきうみまはとそとく小換扱也て主場

○相金のぬい被三起物と或華族(周旋色)

あひしより相量もあれば合指四と葉子折

と持散宗新在町の小棟の内と尋ねる

あつたれと述ニ多品と足出まほ

小棟のその後の死のじ「あつたれ

いふ死はさおれを穿たるんあ

男あ持しをあひいあるせぬを忘の

あませんかと

兼はねねと

利春の相小

〓 五世小似合ぬらりかまを

由後世小似合ぬらりかまを

いよく持をあられすおとををれ

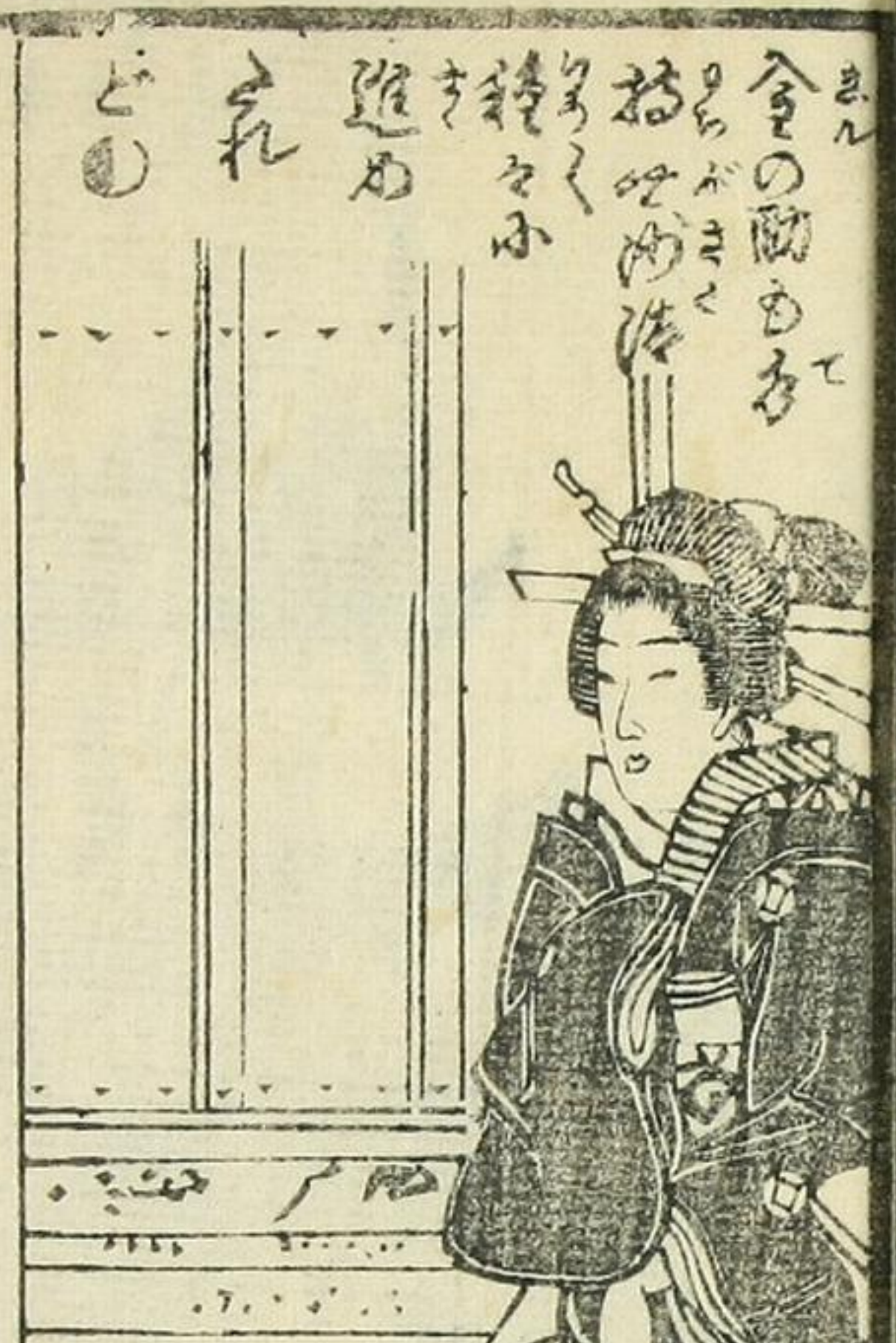
とまるとま事のそと葉子折

ふじぬ〇正月も三羽三羽旬

仲男の係をまをそ上殿公を

地内の八百番(集集)まひか

一回八年後町の



金の駒もあ

持てめは

持てめは

持てめは

持てめは

大松

中橋世

金のぬいを

外一牧家

町道辺の折

屋へ入る

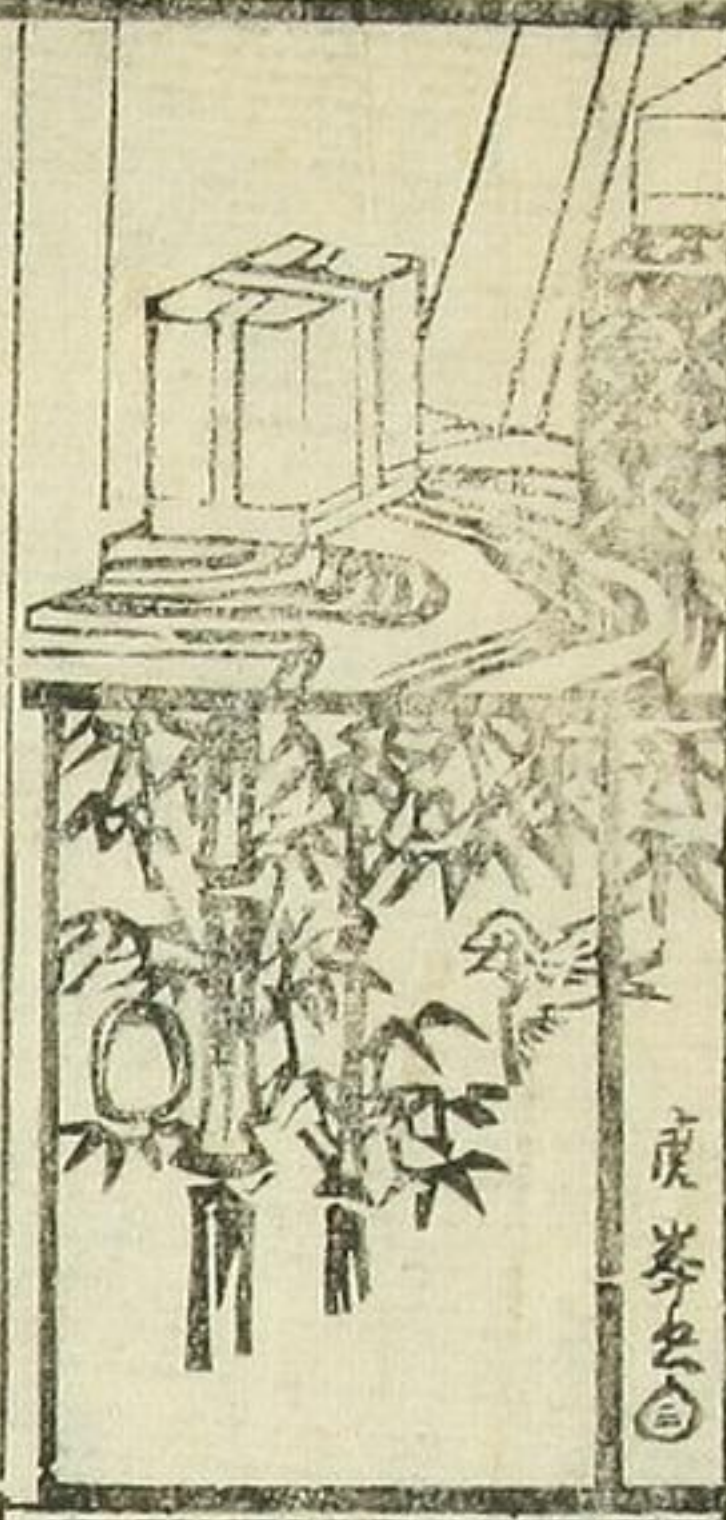
小棟小似

あひし

ハト

入る

智



小隠さんいへ
 人どとのい
 出たやあまの
 忍のついでと
 ありまがえ
 べのおれと



どもどうと
 云ふがふれと
 用や一替ら
 氷柱の錢
 多むと今
 愛蔵おん
 備し金の
 途百れが



くさ

ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき

海ねのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき

くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ



くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ
くさ

ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき

海ねのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき
ふぶきのふぶき

ついで一等加賀守をあらんまゝにわがまを
 招合へ候へまはすうらまはしめて中へよ
 けしきもよる御切中合のやまも入切
 益とらふじ名積へ候と神とあら
 秋家として候りる
 ○この小澤澤やふ麻さ
 帯も兼造とある
 かの天極を傳の
 岸仲買来の牌の中へ
 兼造もはつと傳せぬがふれ
 世邊りの何処にもお世話を
 只おね候後度して合のあまもをさく

小堀が遺つて合の外は又何れ
 洞達して兼造と世のれ
 及と急ぐお積跡小日敷を
 て大おふまゝ

○是より合の外は又何れ
 兼造もはつと傳せぬがふれ
 世邊りの何処にもお世話を
 只おね候後度して合のあまもをさく



新編西國奇談 廿編より 追々出版

薄緑娘あまなみ 八編より 追々出版

娘庭訓黄金の鶏 追々出版

御届 神田區仲町二丁目六番地
 明治十一年十二月十七日 編輯人 篠田久次郎
 日本橋區米沢町二丁目七番地 出版人 堤吉兵衛
 地本錦繪問屋

